

港ユネスコ協会



Minato UNESCO Association
40th Anniversary
Publication
2011~2021



創立40周年記念誌

(表紙について)

2017年12月1日刊 会報第150号より：
山本俊介会員の油絵が第53回蒼樹展で受賞。

去る10月24日～30日、東京都美術館で開催された第53回蒼樹展において、当協会の山本俊介会員が出品された油絵「アドリア海の風」(写真)が文部科学大臣賞の表彰を受けました。展示期間中にこの100号油絵の大画面をじかに拝見したのもとして、会員仲間のこの快挙をご報告できることは大きな喜びです。



今後、益々のご活躍をお祈りいたします。山本会員からは下記のコメン
トを頂戴しました。

「蒼樹会への出品は、20余年になります。2009年に東京都議会議長賞、2014年に毎日新聞社賞を受賞している私としては、今回の文部科学大臣賞は最高の受賞であり、2017年は記憶に残る年となりました。建築の設計という社会との関わりの多い仕事をして来た私の絵の主題は、理解しやすく人間が描かれている具象画です。高い城壁の上からアドリア海の風を感じながら美しい街ドブrouニクを描いたのが評価され、受賞に結びついたと思います」

(副会長 平方一代)

港ユネスコ協会



Minato UNESCO Association
40th Anniversary
Publication
2011~2021

創立
40
周年
記念誌

目次

● 港ユネスコ協会とは2

● ご挨拶3

永野 博 港ユネスコ協会会長

■ 祝辞

武井 雅昭 港区長

浦田 幹男 港区教育長

田口 康 日本ユネスコ国内委員会事務総長

佐藤 美樹 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟会長

池田 敬介 東京都ユネスコ連絡協議会会長

伊藤 公平 慶応義塾長

木曾 功 千葉科学大学学長
元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使

坪谷ニユウエル郁子
東京インターナショナルスクール理事長

東郷 和彦 京都産業大学教授・世界問題研究所長
元オランダ駐劄特命全権大使

小林 亮 玉川大学教授・ユネスコクラブ顧問

佐々木 剛 東京海洋大学教授

渋谷 恵 明治学院大学教授

広瀬 克己 東京都立三田高等学校 国際教育部主任

三輪 公忠 港ユネスコ協会 名誉会長

高井 光子 港ユネスコ協会前会長・顧問

4

■ 創立40周年記念事業12

★ 記念シンポジウム:

地域が育てる自然保護区

—ユネスコエコパーク—

★ 記念日本語スピーチコンテスト

■ 各委員会の紹介

◆ 会員開発委員会

◆ 広報・インターネット委員会

◆ 語学研修委員会

◆ 国際学術文化委員会

◆ 坐禅体験委員会

◆ 世界の料理委員会

◆ 日本語スピーチコンテスト委員会

◆ 文化体験教室委員会

◆ みなと区民まつり等委員会

◆ ユース委員会

◆ 事務局

18

■ 会員の声30

★ 創設時の会員

★ 会員の声

■ 開催チラシで見る過去10年間の
主要事業40

■ 各委員会の事業報告43

■ 会報「巻頭言」リスト63

■ 歴代および現在の役員64

★ 2011年度～2021年度／役員推移表64

★ 2011年度／港ユネスコ協会役員66

● あとがき68

● 港ユネスコ協会とは

港ユネスコ協会とは、1981年10月17日に設立された、東京都港区内に拠点を置いてユネスコ活動を行っている民間のボランティア団体です。港区は日本で最初に外国公館が置かれたところ。現在大使館の半数以上が同区内にあり、また人口比で在住外国人が最も多い地域の一つであり、外資系企業の多さは日本一です。そんな地域的要請から、区内在住の外国人と日本人のよりよい交流を目的に当協会が発足しました。会員制で、現在会員は同区内ばかりでなく首都圏にまで及んでいます。活動は、地球人として我々はどうすべきかを考えるシンポジウム、ゆかた着付けや書道などの実演による日本の伝統文化紹介、国際理解講演会、世界の味文化紹介、みなと区民まつり参加、語学教室など興味深い行事が目白押しです。これら活動の多くは、港区教育委員会との共催により行われています。

● ユネスコとは…

パリに本部を置く、国際連合教育科学文化機関のことです。その英語名のUnited Nations Educational, Scientific and Cultural Organizationの頭文字をとってUNESCOと略称され、親しまれています。ユネスコの目的は、ユネスコ憲章の中に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という言葉ではっきり示されています。日本は1951年7月、60番目の加盟国となりました。

● 民間ユネスコ運動とは…

ユネスコ協会は民間のボランティア団体です。「相互理解を深め、教育・科学・文化・コミュニケーションの分野で、国際平和と人類共通の福祉を促進しよう」というユネスコの理念に共鳴した人びとによって、世界で初めて民間によるユネスコの協力団体が、1947年仙台で誕生しました。この運動はまたたく間に日本全国に波及し、現在は270をこえる協会が各地で活動しています。

● ユネスコ会員綱領

- *心の中に平和の守りを固めよう。
- *全ての人間の尊厳を重んじよう。
- *教育・科学・文化の力を通して、平和の発展に努めよう。
- *民族間の疑惑と不信を除こう。
- *世界を友愛と信頼の絆で結ぼう。



Minato UNESCO
Association
40th Anniversary
Publication



港ユネスコ協会は2021年10月に創立40周年を迎えました。設立時の丹下健三初代会長から始まり、三輪公忠会長、高井光子会長のもと、ボランティアによる会員が幾多の活動を重ね、協会を発展させてこ

られたことを嬉しく思っております。

平和の実現を理念として掲げるユネスコは第二次世界大戦後の日本の進むべき方向を指し示す大きな役割を果たしました。日本のユネスコ加盟の導火線となった民間ユネスコ運動は、世界に誇れる日本の草の根運動です。港ユネスコ協会が、全国で活動する多くの地域ユネスコ協会と相携えて40年もの間、活動を続けてこられたのには、これまでの会員の献身的な努力があったからだと思います。

ユネスコの創設から75年、日本のユネスコ加盟から70年を経た現在、世界が平和に向かっているかといえば、ロシアのウクライナ侵攻に端的にみられるように逆方向に向かっているような感じさえ致します。また平和の実現のために行うべき活動は、平和を掲げるものばかりでなく、持続可能な開発のための目標（SDGs）に関連する多様な事象、例えば気候、地球環境、生物多様性、人権、ジェンダー、エネルギー、ひいては私たちの生活、働き方自体も世界の平和とかかわるようになってきています。

各地のユネスコ協会は地域の特性に応じて様々な活動を行っています。港ユネスコ協会の活動は、大きく3つに分けられます。第1は、港ユネスコ協会の所在する港区は外国に関係する活動が盛んで外国人も多いことから、異文化間の交流に力を入れてまいりました。さまざまな魅力あふれる文化体験活動や

日本語スピーチコンテストには多くの外国の方々に参加され、交流を深めています。ユネスコ憲章でも、相互の風習と生活を知らないことが戦争の引き金になったと述べられていますので、異文化交流の実践は不可欠なことだと考えています。

第2には、国際機関としてのユネスコが世界に向けて行う活動の市民への浸透に対する寄与ともいえるべき活動です。例えば2021年から始まった国連海洋科学の10年、50周年を迎えた「人間と生物圏(MAB)」計画（ユネスコエコパーク事業）などについて、平和を考えるシリーズと題して連続的にシンポジウムを行ったり、危機にある世界遺産についての講演会などを行っています。

そして第3として、平和の理念の理解・実現においては、若い方々と交流し、思いを伝承していくことが大事ですので、東京海洋大学との「森・川・海とそのつながりを知る」芝浦沿岸探索クルーズ、都立三田高校との戦争の体験の伝承会などを行ってきました。コロナ下においてもこれらの事業の多くは継続して行ってまいりました。参加した方々の心に響くものがあれば幸いです。

港ユネスコ協会のこれらの地味な活動に対して長年支援をいただいている港区にはこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。また、様々な事業に講師などとしてご協力いただいている方々、さらにボランティアとしてかかわられている会員の方々には、日頃の活動に心より感謝しております。これからも皆様のご支援、ご協力を得つつ、会員が力をあわせ、少しでも世界の平和につながる活動をしていきたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

MJIA 40

創立40周年への祝辞

創立40周年に寄せて

港区長
武井 雅昭



港ユネスコ協会が創立40周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

港ユネスコ協会は、1981年10月に設立されて以来、40年の長きに亘り、ユネスコ憲章の精神に基づく国際平和の推進と多彩

な国際交流活動に積極的に取り組んでこられました。

皆様には日頃より、国際理解講演会や日本語スピーチコンテスト等の各種事業を通じて、地域における異文化交流及び国際的相互理解の促進のため、ご活躍いただいております。またコロナ禍においても、徹底した感染防止策とオンライン配信の導入など、活動継続のため絶え間ない努力を続けていただいております。皆様のご尽力に心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

区は、「やさしい日本語」や多言語による情報発信などを通じ、港区ならではの行政サービスに対する満足度をより一層高め、国籍の異なる人々が互いに文化的違いを認め合い、相互理解を深めながら、ともに支え合う多文化共生社会をめざしています。

今後とも、港ユネスコ協会の皆様と連携を深め、平和の尊さを広く世界に向けて発信するとともに、国際性豊かな地域特性を生かし、活力と魅力あふれる成熟した「国際都市・港区」を推進してまいります。皆様のなご一層のお力添えをお願いいたします。

港ユネスコ協会のますますの発展と、永野博会長をはじめ会員の皆様のご健勝とご活躍を心から祈念し、お祝いの言葉といたします。

心からお祝い

港区教育長

浦田 幹男



港ユネスコ協会創立40周年、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

創立については、当時の港区教育委員会から、国際性に富んだ港区にユネスコ協会を創立したいという想いを、国際文化会館の松本重治理事長に相談させて頂きました。そして、初代会長の丹下健三先生をはじめ、多くの会員の皆さんの情熱が注がれ、港ユネスコ協会は誕生しました。

現在も、変革する時代・そして近年のコロナ禍の中で、至誠のユネスコ憲章の精神に基づき、弛まぬ努力と成長をされており、多種多様なアプローチで港区の国際的相互理解及び国際親善に大きく貢献されております。皆さんの熱意ある積極的な活動と功績に対しまして、敬意を表するとともに、心から御礼を申し上げます。

現在も、変革する時代・そして近年のコロナ禍の中で、至誠のユネスコ憲章の精神に基づき、弛まぬ努力と成長をされており、多種多様なアプローチで港区の国際的相互理解及び国際親善に大きく貢献されております。皆さんの熱意ある積極的な活動と功績に対しまして、敬意を表するとともに、心から御礼を申し上げます。

2021年は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、港区ではトライアスロンとマラソンスイミングが行われました。同大会は、人間の育成と世界平和を目的とした国際的なスポーツの祭典であり、国際理解が大きく深まる契機となりました。また、港区は、全国で最も多くの大使館が立地する「国際都市」として大きな役割を担っており、学校教育だけでなく、社会教育の分野においても国際理解教育を充実することが大変重要と考えています。

教育委員会では、我が国の伝統や文化を発信する力を育むとともに、世界の多様な文化を尊重し、世界の人々と共生することができる、真の国際人の育成に努めてまいります。

今後とも、港ユネスコ協会のお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

永野博会長をはじめ会員の皆さんには、記念すべき創立40周年を契機とされ、更なるご活躍をされますことを念願いたしますとともに、港ユネスコ協会の益々の発展を心から祈念いたしまして、40周年を迎えてのご挨拶といたします。

敬意を表して

日本ユネスコ国内委員会事務総長

田口 康



港ユネスコ協会の創立40周年を心からお祝い申し上げますとともに、これまでの関係者のご努力に敬意を表します。

2021年は、ユネスコの設立75周年、我が国のユネスコ加盟70周年という節目の年でもありま

した。70年前、日本政府は、戦後初の国際機関加盟となるユネスコ加盟を果たしましたが、我が国のユネスコ活動は、75年前のユネスコ設立直後から始まっていました。平和を求める民間を主体としたユネスコ運動の大きな盛り上がり政府を動かし、我が国のユネスコへの早期加盟を実現させたのです。そして現在でも、我が国のユネスコ活動の中心は、港ユネスコ協会をはじめとする全国のユネスコ協会など多様な団体による民間活動です。日本ユネスコ国内委員会としては様々な形でこれらを支援していく所存です。

コロナ禍は、世界中の人々の生活を一変させ、人々の分断をもたらしました。また、国際情勢の変化やDXなどの技術の進歩により、人々の生活の不確実性が益々高まっています。このような時にこそ、「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ宣言冒頭の言葉とそれに基づく人々の活動が重要になるのだと思います。港ユネスコ協会が、国際平和及び人類共通の福祉のために、そして港区民のためにその活動を発展させていくことを祈念し、お祝の言葉とさせていただきます。

創立40周年に寄せて

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟会長

佐藤 美樹



港ユネスコ協会が創立40周年を迎えられることを祝し、日本ユネスコ協会連盟を代表して心よりお祝い申し上げます。

ユネスコ理念の基、地域社会に根ざした活動を展開してこられた、永野博会長をはじめとす

る歴代役員並びに会員各位、そしてそれを支えてこられた地域の方々のご功績に対し、深甚なる敬意を表する次第です。

港ユネスコ協会は、行政や他団体との綿密なる連携のもと、会員間の団結をもって、国際理解講座や日本文化の紹介など、多様な背景を持つ地域住民が暮らす港区だからこそその活動に取り組んでこられました。今日においても、活動を継続しておられ、その存在価値をますます高められていることに改めて敬意を表します。いま、多くの国でかつてないほど格差が拡大しています。私たちは教育こそが問題を根本から解決する力であるとの認識のもと、地域社会の中で平和の種を播き続ける活動を展開してきました。今後も港ユネスコ協会の皆さんと共に、平和で持続可能な社会の実現を目指し、草の根の活動に取り組んでまいり所存です。

最後に、これまで港ユネスコ協会の40年に亘る活動にご支援いただいたすべての関係者の方々のますますのご発展とご健勝を祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

心新たにご発展を

東京都ユネスコ連絡協議会会長

池田 敬介



港ユネスコ協会創立40周年を迎えられました会員の皆様、東京都ユネスコ連絡協議会26団体ユ協を代表いたしまして、心からお祝い申し上げます。

港ユネスコ協会の設立は、当時の港区教育委員長が港区に国際交流を行うためのユネスコ協

会が必要だと熱心に働きかけられたことから誕生したと伺い、その成り立ちの経緯に大変感銘を受けております。以来、今日まで港区長、教育委員会の後押しを受けて、官民共創で時代の変化に敏速に対応され、地域・日本・世界の動向を鑑みたユニークな草の根活動を展開されてこられました事に心から敬意を表します。

港ユネスコ協会の長きにわたるご貢献のすばらしさは、時代に先駆ける活動の原動力となっている理想に燃える各分野で活躍されている人財が大変豊富であること、また「教育、科学、文化、国際理解をとおして平和を築こう」という精神に賛同して様々な活動を会員の皆様が協力して実践されてきたことです。

特にこれまで実践されてきたイベント一覧の資料を参照いたしますと一目瞭然です。講演会・国際シンポジウム、ディプロマッツ・レクチャー、日本文化紹介、語学教室、世界の味文化紹介・料理ワークショップ、ユース活動、日帰りバスツアー、大使館訪問、MUAサロン、ニューイヤーフレンドシップ・パーティー等、多岐にわたる魅力ある活動内容にあふれており、その原動力は企画から実施に至るまでの会員の皆様のご尽力の賜物によるものだと確信いたしております。

世界的にウイルスが蔓延し脅威を振るっている今日、人類対ウイルス戦争は国を超え共通の課題を投げかけています。また地球温暖化、気候変動は人間中心の過度に行き過ぎた文明が自然とのバランスを無視して発展してきたことが要因していると考えられ、緩和と適応対策が地球規模で私たちに求められています。

これらの課題に対して私たちは、持続可能な社会を推進することをミッションに掲げて、誰も取り残さない社会の構築のために、今、何をすべきか？何ができるのか？が問われています。

日本の民間ユネスコ協会の担い手として、心新たに、港ユネスコ協会が益々のご発展を遂げられますことを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

創立40周年に寄せて

港ユネスコ協会顧問
慶應義塾長

伊藤 公平



港ユネスコ協会が創立40周年を迎えられことに対し、同じ港区を本拠地とする慶應義塾として心よりのお祝いを申し上げます。

ユネスコは、わが国が第二次世界大戦後に初めて参加した国際機関です。国連への加盟の5

年も前に実現したこの快挙は、占領軍をも動かした平和を願う国民の気持ちを大きな運動に盛り上げた各地の地域ユネスコ協会による草の根的な活動の成果であることはよく知られています。

私たちが幸せを感じる社会は、個々の人が思いを述べ、討議をし、その結果が守るべき約束になるといふ、考える個人から成り立つ社会であると考えています。地域ユネスコ運動はその最適な事例といえ、これは慶應義塾を開いた福沢諭吉が強調された独立自尊という考えの実行に通じるところがあります。地域ユネスコ協会がその後拡大し、現在では港ユネスコ協会をはじめとして全国に270を越える協会が活動されていることには心強いものがあります。

ユネスコ設立75年を経て、ユネスコの理念である平和の実現はまだまだ先の目標であるばかりでなく、近年の国際情勢には厳しいものがあります。「人の心の中に平和の砦をつくる」というユネスコの理念は色あせるところか、ますます貴重なものとなっています。このような中で、ユネスコの理念の普及、異文化理解の促進などを市民レベルで地道に行っている港ユネスコ協会の活動には大きな期待をしており、更なる発展を祈念しています。

世界遺産の課題

港ユネスコ協会相談役
千葉科学大学学長
元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使

木曾 功



佐渡島の金山遺跡が、ユネスコ世界遺産の候補地として、先日正式に決定されユネスコ本部に申請がなされました。本件については、韓国政府が戦時中、朝鮮半島出身者が「強制労働」の被害にあった場所だとし、反

対の立場を明確にしています。

7年前、長崎端島（軍艦島）を含む幕末・明治の産業革命遺産の登録の際にも、大きな外交問題となりました。この問題の本題は、戦時中の「総動員令」により、徴用された労働者、特に朝鮮半島出身者が、端島炭鉱や佐渡島の金鉱で、人道的に酷い扱いを受けたかどうか争点なのです。

日本政府の立場は、当時日本国の一部であった朝鮮半島出身者がこれらの場所で徴用工として労働に従事したのは事実であるが、多くの日本人と同様に、賃金も支払われ、食料等の配給も実施され、実態として「強制労働」のような酷い労働条件ではなかったと考えています。

一方、韓国政府の立場は、当時の徴用工の実態は、「強制労働」に該当するほど酷い非人道的なものであったと主張しています。事実はどうだったのでしょうか？ 事実関係を徹底的に検証し、この問題に決着をつける必要があるのではないのでしょうか？

特に、佐渡の金山について、関係文書や書類等が残されているようですし、なにより、まだ当時の様子を知っている関係者が高齢となっておられますが生きておられます。おそらく、今後5年程度が証言等を得る最後の機会ではないでしょうか。

これらの史料を冷静に、客観的に検証していく作業には、歴史学、政治学、法学、経済学等のグローバルな専門家の協力が必要です。私自身、この問題の解決に少しでも貢献できれば幸だと考えています。

誇りに思います

港ユネスコ協会理事
東京インターナショナルスクール理事長
坪谷ニューエル郁子



「相互理解を深め、教育・科学・文化・コミュニケーションの分野で、国際平和と人類共通の福祉を促進しよう」というユネスコの理念に共鳴したボランティアが会員となり、区民の10%が外国籍という東京都港区に

おいて創立された当会も創立40年を迎えました。私はこれまで三輪、高井、そして現在は永野会長のご指導の元、微力ながら少々のお手伝いをさせていただいております。

特に近年は「日本語スピーチコンテスト」に関わらせていただいております。このコンテストは10名程度の様々な国籍の皆さんがそれぞれの思いを日本語で語るという会です。わたしがこの会が大好きなのは大きな理由があります。通常コンテストという一定の同質内、例えば高校生であったり、職業人であったりと年齢、属性、バックグラウンドの近い間柄で行われることが多いように思います。

このコンテストは子供から学生から社会人から高齢者から、実に様々な人々が参加いたします。中学生が気候変動について自分に何ができるかを熱弁する。大学生が来日以来夢中になっているラーメンについて語る、大使館の職員が来日して知った日本人の優しさについて語る。実に多様な年齢、属性、社会性、文化性、経済的なバックグラウンドを持った方々がフラットな関係で参加なさるのです。真のダイバシティーがここにはあると言えます。そしていつかはこうして世界が一つになれる日が来ることを心より祈ってやみません。

港ユネスコの会員であることを私は誇りに思います。皆さんもぜひお仲間になりませんか？

ユネスコとの更なる協力を祈って

港ユネスコ協会理事
京都産業大学教授・世界問題研究所長
元オランダ駐劬特命全権大使

東郷 和彦



私が港ユネスコのメンバーに名を連ねてから、約10年がたつ。私は、戦後の日本が衣食の面では世界レベルを追いこす発展を遂げながら、住の面、特に、景観・風景・ランドスケープデザインと言った側面のあまりの劣

悪さに非常な違和感をもっていた。

2015年に、港区高輪泉岳寺の入り口に立つ山門の真後ろに8階建てのマンションを建てるという計画が急浮上した。私はこの景観破壊計画をつぶすために、考えうる限りの努力を傾けた。港ユネスコの会合にも出席し、今港区で起きている文化の危機の問題についてお話をさせていただいた。東京都の再開発計画の一環として泉岳寺の夢がかなうことを、今は心から祈っている。

2018年6月には、五十嵐敬喜法政大学名誉教授・元日本景観学会会長が前年末に出版された『世界遺産 ユネスコ精神 平泉・鎌倉・四国遍路』に関する講演会のアレンジに参加させていただいた。

今日本とユネスコとの関係が、産業遺産問題をめぐって収拾の見通しのたたない状況に陥り、五十嵐敬喜先生がその矢面にたっておられるのをまじかに拝見しつつ、あの平和で穏やかな講演会が夢のように思い出される毎日である。

平和構築のナビゲーターとして

玉川大学教授・ユネスコクラブ顧問

小林 亮



2021年に港ユネスコ協会が設立40周年を迎えられることに心よりお祝い申し上げます。数ある日本の民間ユネスコ団体の中でも港ユネスコ協会は規模においても活動実績においても抜きん出た存在です。気候変動や国際対立の尖鋭化など人類社会が多くの困難な危機状況に直面している今日、港ユネスコ協会にはぜひ強力に、平和で持続可能な社会の実現に向けたイニシアティブを発揮して頂きたいと期待します。

港ユネスコ協会は各国大使館や在住外国人が多い港区の地の利を生かして、教育や文化の国際交流をはじめ実に多彩な活動を展開して多くの成果を上げてこられました。永野博会長のお誘いにより私も玉川大学ユネスコクラブの学生たちとともにファシリテーターとして関わらせて頂いている「日本語スピーチコンテスト」は、わけても異文化理解の促進に顕著な貢献をしているすばらしいイベントです。

港ユネスコ協会は2017年より毎年、計5回にわたる「日本語スピーチコンテスト」を開催してきました。日本語というツールを通して在住外国人のスピーカーが自国の文化や視点を日本の参加者の方々と分かち合うことで、国籍や民族を超えた友情の輪が築かれていく感動体験こそ、このイベントの醍醐味と言えるでしょう。

こうした草の根の「文明間の対話」によってこそ、「平和と非暴力の文化」への着実な基礎が築かれていくのだと思います。国連SDGsやユネスコの「教育の未来」プログラムが提唱するように、私たちの生き方が根源的に問い直されている今日、港ユネスコ協会にはぜひ平和のナビゲーターとしてますます意義深い活動を展開して頂きたいと願っています。

こうした草の根の「文明間の対話」によってこそ、「平和と非暴力の文化」への着実な基礎が築かれていくのだと思います。国連SDGsやユネスコの「教育の未来」プログラムが提唱するように、私たちの生き方が根源的に問い直されている今日、港ユネスコ協会にはぜひ平和のナビゲーターとしてますます意義深い活動を展開して頂きたいと願っています。

「東京の森川海を知る」を一緒に

港ユネスコ協会会員

東京海洋大学教授

佐々木 剛



港ユネスコ協会設立40周年誠におめでとうございます。「東京の森川海を知る」では、ご尽力いただき誠にありがとうございます。海に面した港区で一緒に活動できることを大変うれしく思います。

私が御協会に訪問したのは、2018年で、ちょうどIOC-UNESCO（ユネスコ政府間海洋科学委員会）の海洋リテラシー国際シンポジウムに出席した後のことです。シンポジウムでは、本研究室が取り組む「森川海のつながり意識」を高める水圏環境教育プログラムが海洋リテラシー推進に有効であると評価されたこと、また、IOC海洋リテラシーガイドブックに掲載されたことを報告いたしました。

2021年、持続可能な開発のための国連海洋科学の10年がスタートし、海洋リテラシー教育の重要性が強調されました。

東京湾は、閉鎖性水域と呼ばれ、人間活動がダイレクトに影響する場所であり、陸上と海との相互作用を理解し、考え行動するきっかけとして大変重要な場所です。私達が取り組む「東京の森川海を知る」の活動は、我が国を代表する海洋リテラシー教育として、持続可能な東京湾と人間活動の関わり方に一石を投じる活動です。なぜならば、身近な海の状態を自ら進んで理解し、考え行動することによって、東京湾はよみがえり持続可能な人間活動と海洋との関わりが構築できると考えるからです。

今後も、海に面した港区の地の利を活かし、海洋リテラシー教育の推進役として期待いたしますとともに、これからますますの御協会のご発展をお祈り申し上げます。

語りかけ、学びつつ、平和を創る

港ユネスコ協会会員
明治学院大学教授

渋谷 恵



2015年より港ユネスコ協会の企画に参加させていただいています。特に日本語スピーチ・コンテストでは、言語や文化、経験の違いを超えて互いに伝え合い共に学ぶことの重要性、同じ地域・同じ地球に生きる仲間と

して絆を深めていくことの意味を深く感じています。

1945年に採択されたユネスコ憲章は、その前文のなかで「平和は、失われたいためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない。」と述べています。港ユネスコ協会の活動は、知的かつ精神的な連帯の場を一人ひとりの関わりのなかに創り上げ、その連帯を地域、世界へと広げる基礎となるものであると思います。

この度、平和講演シリーズなどを通して40年間の活動の蓄積に触れさせていただき、これまで活動を支えてこられた皆様の平和な社会を願う思いの深さ、また「語りかけ、学びつつ、平和を創る」というアプローチの意義を強く感じました。そして、その願いとアプローチが、日本語スピーチ・コンテストを始めとする現在の活動にもつながっていることを改めて認識しました。

近年、私たちの社会を取り巻く状況はますます混迷を深め、感染症の拡大、気候変動、社会的格差の拡大、テロや紛争の激化など、平和で健やかな未来を構想することが難しい状況が生じています。社会全体に分断や孤立、不信任感、不寛容が広がっているようにも感じられます。

こうした状況の中だからこそ、人々が互いにつながり、それぞれの生への深い関わりと共感を持ち、理解と共感に基づいて行動していくことが求められるのではないのでしょうか。港ユネスコ協会による共に語り、共に学び、共に平和を創る活動のますますの発展を願っております。

心よりお慶びを

東京都立三田高等学校 国際教育部主任

広瀬 克己



港ユネスコ協会が40周年を迎えられたとのこと、心よりお慶び申し上げます。

数年前まで国際交流にあまり縁のない職場にいた私にとって、恥ずかしながら、ユネスコに対しては世界遺産に関係があるか

な、という程度の認識しかありませんでした。縁あってユネスコ・スクールである三田高校に赴任、国際教育部に配属され、ユネスコの活動について知る機会も少しずつ増えましたが、日常の生活とは少し離れたもの、という印象はまだ残っておりました。

ユネスコ委員の生徒と共に港ユネスコ協会を訪問させていただき、第二次世界大戦のお話をうかがうと聞いたとき、最初は多少の違和感がありました。しかし実際に体験談をうかがううち、様々な場面がより現実感を伴って脳裏に浮かびました。ドラマや映画でしか見たことのない光景を、個人の眼を通して追体験するような、不思議な感覚でした。同時に、平和のかけがえのなさも改めて胸に迫りました。生徒たちも間接的な話だけでは得られない、体験の重みを受け取っていたようです。

今このときも戦火の中、不安な日々を過ごす人たち、子供たちが世界にはまだ数多くいること、そんな子供たちの数を一人でも減らすことが、私たち大人の責務であると痛感した瞬間でもあります。若い生徒たちにはもちろん、私にとっても、言葉に尽くせないほど有意義な時間でした。

訪問が叶わないまま時間が過ぎていますが、一日も早く再訪できるよう願っております。

創立40周年に寄せて

港ユネスコ協会名誉会長

三輪 公忠



2021年の今年、92歳になったのだからあの時私は50代のはじめだったのだ。50といえば半世紀、けっこうな歳ではある。

当時すでに文部大臣でいらしたのかな、記憶は定かでないが、永井道雄さんが、居並ぶ在京の

各国大・公使など来賓を前にして、港ユネスコ協会創立の意義を語り、祝福してくださった。初代会長として丹下健三さんが、国際文化会館の松本重治さん等と共に、港区在住の高名な文化人を鳩合してめでたく発足したのであった。

丹下先生はちょうど10年会長を務められ、港区のユネスコ活動の基礎を盤石なものとしてくださった。私の会長職20年は発展一途の時であったと記憶するが、それはみな創立期10年の丹下先生のご努力の結果であったと感謝している。そして会員の皆さんと共に創立40年のよき日を祝うことのできることを限りなく幸せに感じております。

会員の皆さん、港ユネスコ協会創立40周年まことにおめでとうございます。お若い会員の皆さんの新しい力を支えとして、いっそう発展しますよう、心より深く祈念いたします。

心の中に平和の守りを固めよう

港ユネスコ協会前会長・顧問

高井 光子



東京の真ん中に位置し、経済、文化、教育、科学など先進日本の中心であり、豊かな歴史に恵まれた、平和な国際都市「港区」。この地で1981年10月誕生したボランティア組織「港ユネスコ協会」は満40歳となりました。お

陰様で、今も元気に、地道に、初志の理念「国際平和と、人類共通の福祉に貢献する」を忘れることなく、地域に根ざした活動を続けています。

これは、歴代の区長様、そして区議会や区教育委員会の皆様からのご支援、ご協力を頂いていたからこそだと存じます。この機に心から御礼申し上げます。そして、多様な諸活動にご参加ご協力下さった大勢の皆様がたに感謝申し上げます。

40年の間に、世界も日本も、諸々の面で大きく変化しました。人々の人生、生活、生き方、考え方も大きく変わりました。でも、会員の皆様は初志の理念の実現を目指して、活動を続けてこられました。強いボランティア精神と実行力に敬意を表します。これはきっと、活動に参加し、協力する中で、多くのことを学び、面白さや楽しさ、充実感などを味わってこられたからではないでしょうか。

世界中で、SDGs—世界を変えるための17の目標—にそった活動が強く求められています。地球と自然環境を守り、世界中の人々が幸せに暮らせる為には、助け合い精神と活動は必須です。当協会に大勢の方がたがご参加下さり、活発な活動を繰広げて下さるようにと祈念しております。